

よみがえれ！  
有明訴訟弁護団  
(後藤富和)発行  
092-512-1636  
090-9602-0700

願い  
農漁共存  
即時開門  
農業用水  
防災対策

# タイラギが有明海で大量死 全滅も

【読売・7月17日】県有明水産振興センター(小城市)は、有明海の鹿島市沖などで、二枚貝のタイラギが大量にへい死しているのを確認した。同センターは「原因は分かっている。局所のか広がるのかも含め、調査を続けて注視する」としている。

同センターは昨年4月から月1回、有明海の11地点でタイラギの生息状況を調査している。調査は、海底の約50平方メートル内のタイラギをすべて採取し、生存状況を調べる方法。今月5〜7日の調査で、鹿島市の沖合約6キロの1地点で採取したタイラギの39%が死んでいるのを確認。8日に付近の6地点を調べたところ、すべての場所で61〜28% (平均41%) が死んでいた。

13日に範囲を広げて7地点(一部重複)で実施。太良町沖などの3地点でへい死が見られ、うち1地点は8日の調査で4割ほどだった死滅の割合が全滅となっていた。(略)

## 島原沖で赤潮被害続く

【KTNテレビ・7月19日】今年も今月はじめから橋湾や有明海で大規模な赤潮が発生し、養殖イカダだけでなく広い範囲に被害が出ています。県は原因調査を実施するとともに、漁業者に対策を呼びかけています。

県水産試験場などによりまずと、赤潮の発生は今月3日に有明海と橋湾で確認され、現在も広い範囲で続いています。このうち有明海沿いの海域を漁場とする島原漁協では、通常の漁にも影響が出ているということです。

島原漁協 北浦金守組合長「チヌとかの魚が海面と砂浜に死んで打ち上げられているのが何日も続いた」また雲仙市や南島原市では、あわせて2万匹の養殖ハマチが死に、およそ5千万円の被害が出ています。こうしたなか、きょうは県の職員2人が有明海の12ヶ所のポイントで海水を採取するなどして赤潮の原因を調査しました。県南水産業普及指導センター宮原治郎主査「茶色がかっているので、魚や貝を殺すようなよくない種類のプランクトンがいる可能性が高い」今年梅雨の時期から赤潮が発生して、県は潮流の関係で天草沖から流れ込んだとしていますが、地元の漁業者の中には諫早湾干拓の影響を指摘する声もあります。瑞穂漁協の組合員「直接ではないが諫早湾の調整池からの排水も関係しているはず、閉め切っていないければよかった」県は今後も陽射しの強い日が続くため、漁業者にイクスをほかの場所に移すなど、赤潮への対策を呼びかけています。

## 農相の訪問遅れ、地元漁業者不安

【佐賀・7月14日】8月末以降の地元訪問を示唆した山田農相の発言に、開門調査の早期実施を求める佐賀県内の漁業者は「開門時期が不透明になる」と、不安と不満を募らせた。「佐賀有明の会」会長の川崎賢朗さん(49)は「既に赤松前大臣が地元の意見を聞いており、訪問は必要ないはず」と指摘。参院選長崎選挙区で開門反対を訴えた自民候補が当選して「長崎で

反対派の勢いが強まるのは間違いない。訪問が8月末以降となれば民主党代表選と重なる可能性があり、開門時期はますます不透明になる」と危機感を強める。太良町のタイラギ漁業者平方宣清さん(57)は「参院選前に判断すると言っていたのに、大臣が変わると地元の声の聞きに来ようともしなくなった」と山田農相就任後の対応の変化を批判。「諫早湾問題をはじめ、国民への約束を守れなかったことが参院選での敗北につながったことを理解してほしい」と話した。諫早訴訟弁護団の堀良一事務局長は「今でも赤潮が発生して大変なのに、いかにも対応が遅い」と不満を示した。

## 諫早湾調整池 06年から研究・調査 熊本教授ら「アオコ」の危険性指摘

【朝日・7月21日】諫早湾干拓事業について研究している高橋徹・熊本保健科学大教授らが「諫早湾調整池の真実」を出版した。調整池に毎夏のように発生し、水面を緑色に染めるアオコの危険性を指摘している。同書によると、アオコが発生した南部排水門近くで、2007年12月に採取されたカキから、人体に有害な急性毒素を生み出すマイクロシチン(MC)が高濃度で検出された。同排水門付近のカキからは08年と09年にも高濃度のMCが測定されたという。高橋教授は「ある程度の規模で正確な疫学調査をしないと判断できない」としながらも、影響が事実なら「対策が遅れた」水俣病の再現になるおそれがある」と指摘する。調整池の水は、潮受け堤防内で淡水化され、干拓地の農業用水に使われている。農水省や県は「アオコはどこにでもあり、被害例はない」との立場だ。だが、高橋教授は「野菜への毒素の残留が確認されたとする英国の事例報告があり、大丈夫とは決して言えないはずだ」と強調している。